

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第1章「3・11」

12

人力で電源復旧作業

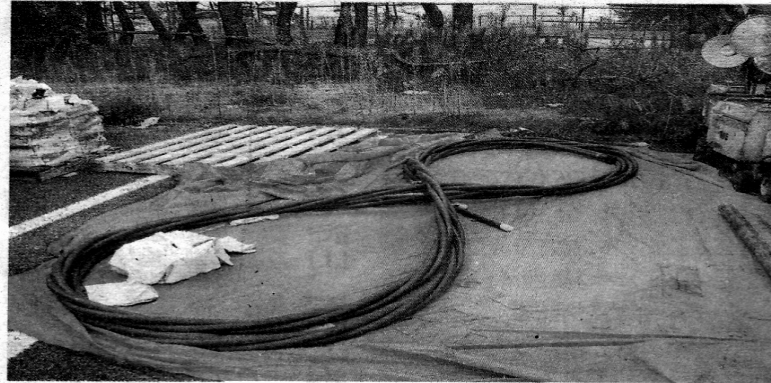
既に用意していた。第1原発では4号機が定期点検中で、点検を請け負った日立は原発敷地外の倉庫に高圧ケーブルを保管していたのだ。

だが高圧ケーブルは銅線を3本束ねたもので、重さは1メートルにつき6トン。200メートル以上必要だった。通常はラフタークレーンという専用重機を使うが、敷地内にはない。人力で敷設するしかなかった。

河合たちが8の字に巻いたケーブルをトラックの荷台に積み、2号機タービン建屋に着いた時には日付が12日になっていた。人力での敷設に向け東電復旧班と日立の計約30人が集まっていた。

いよいよ電源復旧に向けた作業が始まる。皆がそう思った時、足元が揺れた。余震だ。10分おきぐらいに震度3〜4が頻発していた。

津波を警戒するため、何度も避難した。周囲の放射線量が上昇し、全員が免震棟や企業の事務所といった戻って全面マスクを着用することになった。本格的に敷設作業を始めることができたのは夜が明けた12日午前6時ごろだった。(敬称略。年齢肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)



電源復旧に使われたものと同じケーブル。2011年10月、福島第一原発東(京電力提供)

振り下ろしたハンマー

日立GEニュークリア・エナジー福島第一原発所長の河合秀郎(56)の目の前に、高さ3メートル近くある鋼鉄製のゲートがそびえ立っていた。3月11日午後7時、原子炉建屋西側の7番ゲート。向こうに2、3号機の原子炉建屋が月明かりで浮かび上がっていた。

「本当に壊しちゃっていいの?」「お願いします」

河合は7番ゲートを開放して車両が通れるようにするため、ゲートの南京錠を破壊していいか、と同行した東京電力の担当者尋ねたのだ。原子炉建屋は核物質の盗難や破壊

行為を防ぐため高いフェンスで囲まれ、センサーやカメラで防護されている。だが今は電源車を建屋付近に入れるためフェンスに設けられたゲートを開けなければならぬ。

「よし、やれっ」

河合の合図で、日立プラントテクノロジーの村田哲治(51)が大型ハンマーを振り下ろした。1メートル近い柄杓に約4・5トンの金属の塊が付いており、建物解体などで使うハンマーだ。ガチャーン。大きな音を立てて南京錠が壊れた。

電源車を2号機の配電盤につなぐための高圧ケーブルは、河合たちが

「じゃあ、おまえら用意しろよ」

用意しろと言われても、ないものはない。それほど東電本店と現場と

「えっ?ありません」

「じゃあ、おまえら用意しろよ」